

人生に「あいにくの一日」はあり得ない

この瞬間こそが命の確かな時である

今年も、残すところ十日ほどになりました。みなさん、いかがお過ごしですか？ 厳しい寒さの冬が到来しました。風邪など引かれませぬように、くれぐれもご自愛ください。そして、年末のクリスマスの日に、清里の「萌木の村」でお目に掛かれることを、大変、楽しみにしています。

冬の清里を、私は、かなり気に入っています。静寂の中に雪が舞う様子を見ていると、何とも言えない落ち着きを感じるのです。そして、気心の知れた人達と静かに過ごす夜の雰囲気、何とも言えず魅力的なのです。暖炉に薪がくべられ、ストーブなどは違う温かさが伝わります。そして、そこで話す人達に対して、不思議な愛おしさを感じるのです。夏の清里よりは、冬の清里の方が、私には格段に魅力的です。諸君と、そんな素晴らしい時間を共にすることが、年内に残された私の最後のスケジュールです。是非、清里へお越しください。

絶対に、「あいにく」と言わなかった人

最近私が好んでする話。

京都の南禅寺の前にある松下真々庵は、今はパナソニック社の大切なお客様をお招きする迎賓施設です。しかし、元々は、今から五十年以上前に、松下幸之助がPHP活動を始めるために買い求めた場所です。日本庭園は、松下幸之助自らが陣頭指揮して造り直しました。そのために、小川治平の手による百年前の作庭とは言え、今は、松下幸之助の作庭と言って良いほど、原型をほとんど留めていません。

こじんまりとした庭園ではありますが、その行き届いた手入れ、そして究極のおもてなしは、ここを訪れる人達を感動させます。私もしばしば、その価値を分かっていただけそうな人を案内して訪問します。今まで案内したすべての人達が、感動されました。すべての人達の魂を揺さぶる何かが、ここにはあるのでしょう。あるいは、行き届いたおもてなしが、見学者の心をつかむのかもしれない。何度見ても飽きることのない、本当に不思議な空間です。

この松下真々庵の先々代の苑長は、お客様を迎える時に、「あいにく」という言葉を決して使わない人でした。それが凄いと、最近、強く感じるようになりました。人生に、「あいにくの一日はない」と、私自身考えるようになったのは、その人から学んだからです。すべての人達にとって、「今日が最高の一日」だということです。

相手の気持ちの持ち方が変わる

松下真々庵は、一日に二組しかお客様をお迎えしません。しかも、必ず案内役には、パナソニック社の役員クラスの人達が当たります。パナソニックの社員でも、見学

※裏に続いています

したことがある人は、ほとんどいません。それほど、見学できることは、貴重な機会だということなのです。

楽しみにしたその日が来たとしましよう。お客様を胸を躍らせておられます。しかし、日によっては朝から雨という日もあります。しとしと降る雨の中を真々庵に向かう時、「あいにくの雨だな」と、ふと漏らすこともあるでしょう。そんな少し落胆した気持ちで門をくぐると、苑長がにこやかに迎えてくれています。もしその時に、苑長が、「今日はあいにくの雨で、残念なことをしました」と挨拶したとしましよう。お客様の「残念だ」と思う気持ちは、ますます強くなります。

その苑長は、どんな大雨の日でも、「あいにく」とは決して言いませんでした。「今日は良い雨が降っています。雨のおかげで、借景になっている東山連峰が何とも言えない幻想的な雰囲気を醸し出し、天気の良い日には感じられない落ち着いた雰囲気があります。最高です」と言うのです。その一言に、お客様の気持ちが変わりました。なるほど、そのような目で見ると、「雨には雨の風情がある」と思い始めるのです。

目の前のことに一生懸命になる

考えてみたら、人生、「あいにくの日」などありえないのです。私は最近、特に、「昨日は二度と戻らない。明日は、生きていることさえ不確かであるとすれば、命の確かな瞬間は、今この時しかない」と思うようになりました。今をおろそかにして、素晴らしい明日がひらけるはずがありません。だから、常に、今この瞬間を精一杯生きることが、充実した人生をつくり上げてくれる唯一の道なのです。今食べているなら、一生懸命食べる。今寝るのであれば、一生懸命に寝る。今歩くのなら、一生懸命に歩く。命の確かな瞬間である『今』を精一杯生きるのです。人生、それしか他に道はありません。「これから頑張る」と、しばしば口にします。しかし、「これから先は生きているかどうか、本当は分からない」とすれば、「今頑張る」しかないのです。

七十二年の準備をして迎えた今日

私のような年齢になると、世間では、「もう歳だから」と言う人が多いようです。しかし、私は絶対に、「もう歳だから」とは言いません。「七十二年を経て、ようやく迎えた本番の日が今日である」と、朝一番、心に期しています。「私は、七十二年間の準備期間を経て、ようやく人生の本番である今日を迎えました」。それが、今日を迎えた私の決意であり、私の活力の源です。

若いころは、朝、目が覚めて生きていることは、当たり前中の当たり前でした。しかし、私のような年齢になると、朝、目を覚ますこと自体が大きな喜びなのです。先日、私の主宰する『青年塾』に学ぶ障害を持つ若い女性が起きた時に、「良かった今日も生きていた。よし頑張ろう」と独り言を言っていたのを聞いた人がいました。富士山に登る時に、一步一步踏みしめるように、人生もまた、一日一日をしっかりと踏みしめながら歩く以外に、頂上に立てる方法はないのですから。

清里でお目に掛かれない人達には、「どうぞ、素晴らしい新年をお迎えください」とごあいさつ申し上げます。